【論文】

変容する地域社会における黒川能維持の方向性

—質的データを用いた黒川能維持モデルの構成—

小山田晋・長谷部正*・平口嘉典**
 (山形大学・東北大学*・女子栄養大学**)

**Future Direction of Conserving Kurokawa-no in a Changing Local Community:
 Building Kurokawa-no Conservation Model Using Qualitative Data**

Shin OYAMADA (Yamagata University)
 Tadashi HASEBE (Tohoku University)
 Yoshinori HIRAGUCHI (Kagawa Nutrition University)

Kurokawa-no, a folk performance art in Kurokawa, has changed its style with the changes in local society. This paper aims to show a future direction of Kurokawa-no as cultural capital by building Kurokawa-no conservation model by using hearing data from local residents. The model was built from 29 residents' hearing data about their relation to agriculture and Kurokawa-no by grounded theory approach. The model contains many concepts. The concept "custom focused thinking style", which contributes to "Kurokawa-no conservation effort", may decline with the changes in local society. Then Kurokawa-no in the future needs labor-saving, revenue improvement and economic valuation. It means "reinterpretation in Kurokawa-no" is necessary because Kurokawa-no is not an economic activity but a holy ritual. Reinterpreting Kurokawa-no as "tradition" might be accepted by both longtime residents and outsiders. Even an outsider who does not like Kurokawa-no mentioned that Kurokawa-no should be maintained because it is "tradition." However, interpreting Kurokawa-no as "holy ritual" may not be shared by longtime residents and outsiders as seen in a local resident's remark "Kurokawa-no is not a traditional arts but a festival." This "festival" means "Ougi-sai (Ougi-festival)", which is taken place every February and Kurokawa-no is originally performed in Ougi-sai for Ougi-sama (local spirits in Kurokawa). Thus relation of the local residents to Kurokawa-no will vary according to residents' type in the future. For example, both longtime residents and outsiders can deal with Kurokawa-no performance for tourists cooperatively but performance in Ougi-sai might be borne mainly by longtime residents.

Key words : Kurokawa-no, Cultural Capital, Grounded Theory Approach

1. 背景と目的

地域の祭りや芸能といった、地域で住民たちにより長年継承されてきた伝統文化（以下「地域伝統文化」）は、その地域に生きる人びとの誇りやアイデンティティの拠り所としての意味を持つ。地域伝統文化は、観光資源として価値評価された

り、社会関係資本の文脈で意義づけられたりすることが多いが、こうした視点は、地域伝統文化を有用性・経済効率性の観点に偏重して評価してしまいがちである。スロスビーらが提唱する自己目的的な文化資本の一種として地域伝統文化を捉え直すことも必要だろう。そうでなければ、継承の

ための大きなコストを支払ってまで地域伝統文化を維持しようとする地域住民の取り組みを十分に理解できないからである。本研究では、地域伝統文化の維持を地域社会の持続可能性に関連づけ、山形県の伝統的な神事である黒川能を対象として、地域伝統文化の維持に対する地域住民らの意識や試みの総体を住民へのヒアリングデータからモデル化することで、現代において地域伝統文化を維持していくための一つの方向性を示すことを目的とする。

2. 既存研究の整理

1) 地域における地域伝統文化の意義

ここでは、木谷ら〔7〕が地域伝統文化の意義を地域の「発展（特に経済発展）」と「持続可能性」という2つの側面への寄与から論じているのにならい既存研究を整理する。これは本研究が地域伝統文化の意義を後者の視点から捉えるためである。

地域の発展に直接寄与するものとしての地域伝統文化の意義は、厚生経済学における外部経済か、社会学における社会関係資本の問題として捉えうる。前者としては、地域伝統文化を多面的機能の観点から捉えた上で、その価値をCVMで貨幣評価する研究がある(垣内ら〔4〕)。また、観光人類学では、外部者の視線により地域伝統文化が新たに意味づけられ、「商品」としての機能を持つようになるプロセスの研究蓄積があるが(山下〔14〕)、これは地域伝統文化の外部効果が市場に内部化されるプロセスに関する研究と位置づけられる。一方、地域伝統文化を社会関係資本の形成を促すものと位置づける研究もあり、たとえば塚・山本〔13〕は岩手県の「けんか七夕」の実態調査から、地域の祭礼行事のコスト負担を地域内外の主体が補おうとする中で社会関係資本の形成が促されるとしている。

一方、地域伝統文化を地域の持続可能性に直接寄与するものとしても論じうる。木谷らは、地域伝統文化をスロスピー〔12〕のいう「文化資本」の一種として捉え、文化資本を社会関係資本と区別している。文化資本とは経済的価値に還元されない文化的価値（美学的価値、精神的価値などで構成される）のストックとして定義されるもので

あり、厚生経済学や社会関係資本論の枠組みでは捉えることが難しい¹⁾。木谷らによれば、社会関係資本と異なり、文化資本における信頼のネットワークは、地域の歴史に裏付けられたものであり、地域の持続可能性と住民のアイデンティティの形成に寄与する。ここでは、地域伝統文化を含む文化資本は、地域社会の存続を正当化する倫理的根拠として位置づけられているといえる。

本研究では、地域伝統文化としての黒川能を地域の持続可能性と不可分な文化資本の一種として捉え、黒川能維持の方向性について論じる。なぜなら、黒川能を単に地域の発展に寄与するものと捉えるだけでは、なぜ住民らが黒川能維持のために莫大な労力をかけているか理解が困難になるからである。5節で分析する住民対象のヒアリング結果でも、黒川能の負担の大きさにもかかわらず慣習的に黒川維持のために努力が払われていることが明らかになっているが、これは「発展」という枠組みだけでは経済的に非合理的な行動としてしか理解できない。しかし「持続可能性」という枠組みがあれば、住民らは地域伝統文化の維持を通して、地域の歴史的な連続性や文化的な同一性を保つことで、自分たちが生きる場である地域のあり方を持続させようとしているのだと理解できる。

2) 黒川能に関する既存研究

グロスマン〔2〕の文献レビューでは、既存の黒川能関連文献は、「学問的研究」に該当するものでさえも、そのほとんどが黒川能の入門もしくは紹介の域を超えないと指摘されている。数少ない研究成果の一つとしては、黒川能の興行に関する歴史を扱った桜井〔9〕によるものが高く評価されている。一方、本研究のように、現在の地域社会における黒川能のあり方について論じた研究は、管見の限り極めて少ない。近年の上演形態変容の意義と課題を提示した北見〔6〕、質問紙調査により営農状況と伝統芸能維持態度の相関を示した小沢ら〔8〕、黒川能が継承されてきた理由を物語り論と共通感覚論の枠組みで分析した長谷部〔3〕、そして「黒川能らしさ」が外部との関わりの中で形成されてきた経緯を分析した柴田〔11〕などがみられる程度である。そして、これらの既存研究も、黒川能維持の方向性を直接論じ

ているわけではない。

3. 変容する地域社会における黒川能の変化

本節では、黒川能の現状について整理する²⁾。黒川能は、山形県旧黒川村（現鶴岡市字黒川、以下「黒川」と表記）で500年以上にわたり住民に引き継がれてきた神事能である。黒川は農業地域であり、稲作と庄内柿生産が盛んである。表1、2に、黒川の面積、人口構成と農業の状況をまとめた。

表1 黒川の面積および人口構成

面積(ha)	性別(人)	農家比率(%)	年齢(歳)
5,815	男: 694	農家: 19.0	平均: 49.7
	女: 752	非農家: 81.0	
	計: 1,446		

資料: 平成22年国勢調査(面積のみ2010年世界農林業センサス)

注1: 農家比率はかつて黒川が位置していた旧櫛引町のデータで代用した。同町は、面積8,108ha、人口8,162人(2005年時)の農業中心の町だったが2005年の合併で消滅した。

注2: 平均年齢は5歳間隔の度数分布表をもとに(階級値×度数)÷人数合計で求めた。

表2 黒川の農業状況

農家戸数 (戸)	農業従事 家族数(人)	水田状況 (戸, ha)	他の作物状況 (戸, ha)
専業: 30 兼業: 293	平均: 2.7	267, 592 1経営体あたり平均面積: 2.2ha	果樹: 221, 114 麦類: なし 大豆: 76, 68 そば: 25, 17 野菜: 97, 59

資料: 2010年世界農林業センサス

注1: 農業従事家族数の平均は、自営農業に従事した世帯員数÷総農家戸数で求めた

注2: 水田、他の作物は販売目的のものみの数値であり、作付け農家数、面積を示す。

黒川能が「神事」と呼ばれるのは、2月1～2日に行われる王祇祭(おうぎさい)で行われる能であるためである。伝承の母体は、黒川にある春日神社の氏子組織で、上座、下座の2つの宮座に分かれている。王祇祭では、上座、下座から一軒

ずつ「当屋」が選ばれる。当屋の自宅で、ご神体である「王祇様」を迎える儀式、客への食事の振る舞い、そして春日の神への奉納としての黒川能が行われる。住民らは、能役者、食事の準備係、あるいは客として王祇祭に関わる。能役者は男性の役目であり、女性は基本的に準備に徹することとなっている。

黒川能は農村社会の生活様式に適合するように実施されてきた。王祇祭が冬期に行われるのも、準備に農閑期が適しているためである。それゆえ、近年のように伝統的な農村社会が変化しつつある中、黒川能のあり方も必然的に影響を受ける。まず、兼業農家、非農家の増加により能の練習時間が合わなくなっている。少子化で後継者不足も深刻であり、1998年からは冠子(王祇祭で神社と当屋の間を移動させるご神体につきそう子ども)への女子の参加が認められるようになった。また、住宅構造の変化により公民館で演能することも多い。王祇祭の負担を敬遠し当屋をキャンセルする者も現れている。こうした状況に対応するために、1960年代半ばに、上座では「黒川能青友会」と「ひよこの会」が、下座では「黒川能能友会」が若手能役者らにより自主的に立ち上げられ、今も活動を続けている。「黒川能青友会」と「黒川能能友会」は主に黒川能の勉強を目的としており、「ひよこの会」は役を超えて共同で稽古することを目的としている。

1968年に雑誌『太陽』で黒川能が紹介されてからは、黒川能に対する外部の評価が高まるとともに、地域外との交流も多くなっている。1976年には国の重要無形民俗文化財に指定され、外部から訪れる観客も増えていった。地域外での公演機会が増え、1991年には初めての海外公演を行った。「水焰の能」「蠟燭能」など、外部からの観客を対象とした「イベント能」も定期的に行われるようになった。水焰の能は行政主導の公演であり、1984年から櫛引町誕生30周年事業として毎年実施されている。蠟燭能は住民主体のイベントで、第1部で公演が、第2部で観客と役者との交流会が行われる。蠟燭能では、若手や、普段の演能では裏方に回る女性たちが、観客の誘導、特産品販売、観客へのお膳の準備などで活躍している。こうしたイベント能が活発に行われていることから、

黒川能の観光資源化が進んでいるといえる。ただし2月の王祇祭は、参加者への案内に観光イベントではないことが明記されており、イベント能と差別化された神事能としての性格が強調されている。

このように社会状況の変化とともに黒川能もそのあり方を変えてきており、自主的に黒川能維持のための組織が立ち上げられるとともに、上演形態、行政や女性の役割、観客との関係性も変化してきた。しかし、練習時間の減少や、当屋のキャンセル等は依然として残された課題である。

4. 研究アプローチ

1) 研究手法

黒川能維持の方向性について、地域社会のあり方との関わりから考察できるモデル（「黒川能維持モデル」）を作る。そこで、住民対象に黒川能に対する接し方や考え方を調査した上で、調査データを質的研究の一種であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach：以下「GTA」）を用いて分析し、モデル作成を行う。

GTAはもともと看護研究の手法であり、病院における医師・看護師と患者・家族の相互作用をモデル化するために開発された。本研究では、地域社会の変化と、それに対応して黒川能への取り組みを見直そうとする黒川住民との相互作用をモデル化することを目的としてGTAを採用する。なお、木下〔5〕はグレイザーとストラウス〔1〕が考案するGTAを改良した「修正版GTA」を考案しているが、本研究が採用するのはこの修正版であり、以下、「GTA」という用語は修正版の意味で用いる。

GTAでは、様々な「概念」間の関係を示すモデルを作成することを目指す。ここでいう「概念」とは、データの中の特徴ある発言内容をコーディングしたものであり、木下の提案する表3のような分析ワークシートを埋めることで生み出される。発言のうち、回答者間で類似した（あるいは対極的な）内容を、「具体例」の欄に書き込む。この具体例を検討しながら、これらがなぜ類似した（あるいは対極的な）ものとして分類されたかを第三者に説明できるような「定義」を書き込む。そし

て最後に、こうした具体例や定義に適合する「概念名」をつける。こうした分析ワークシートを複数作成していき、必要に応じて概念名や定義を修正する。最終的に、分析ワークシートの追加、修正が必要なくなった時点で概念生成は終了となる。こうした概念間の関係を示したものが「モデル」である。木下や西條〔10〕によれば、人びとの相互作用による「動き」や「流れ」がわかりやすく説明可能であることが肝要であるので、本研究でも、データとモデルとの整合性を確保した上で、こうした「動き」「流れ」を表現することを重視してモデルづくりを行う。概念同士を関係づけた根拠については、モデル説明時に適宜述べることにする。

表3 分析ワークシートの例

概念名	慣習重視思考
定義	自分の希望や欲望に従って意思決定するのではなく、慣習や周りの雰囲気に従うことで自然と何かに取り込む思考様式
具体例	・自然と実家の農業を手伝っていた。 ・長男だったので自然の流れとして現在の農業に従事している。 ・当屋になって隠居するまでは能をやる事が当たり前だと思っている。

2) 調査の概要

2014年2月23～24日にかけて、黒川住民に対する調査を行った。豊かな概念を得るには多様なデータが必要であるので、年代、職業、性別を問わず、この日程で調査可能な者全員を対象者とした³⁾。また、短期間で大人数に調査を行うため、教員・学生を含めた計11名で調査を行った。調査時間は、1人あたり60～90分で、一対一の面接に抵抗を感じる対象者には、多対多のグループ面接を行った。質問項目は表4、5の通りである。表5の「黒川能・農業への関わり方に関する質問」では、話の流れによって質問を増減させても良いこととした。これは半構造化面接法と呼ばれる手法であり、仮説発見型研究に必要なディテールの豊かなデータを得るのに適した手法である。

表4 今後の営農意向に関する質問

問 今後あなたの経営体の経営をどのように進めるべきだと思いますか？（複数回答）

- ①農地の規模拡大
- ②生産コストの低減
- ③経営の複合化（新たな作物の導入など）
- ④6次産業化・高付加価値化（加工や直販など）
- ⑤現状維持
- ⑥新規就農の促進
- ⑦その他（ ）

問 あなたご自身が農業を続けるために必要なことは何ですか？（複数回答）

- ①コントラクター等による農作業支援
- ②農地の集積
- ③組織経営体での営農
- ④集落・地域などの協力体制の確立
- ⑤農業機械・農業施設の再整備
- ⑥営農資金の調達
- ⑦その他（ ）

表5 黒川能・農業への関わり方に関する質問

- ・幼少期の家族構成（祖父母、親兄弟）
- ・幼少期の遊び（良くやっていた遊び、主な遊び相手、遊んでいた場所）
- ・幼少期の農業経験（家族や近所の人々の農作業を手伝っていたか、どのような作業をしていたか、どの程度の頻度か）
- ・友人関係（親しい友達の思い出、親しい友達の現在）
- ・黒川能の思い出（印象的なできごとはあるか、黒川能で何か役をもらっていたか）
- ・進学、就職等の進路決定の契機
- ・農業を始めてからの苦労（農業技術の未熟さ、自然災害、農業を取り巻く社会的状況）
- ・子どもとの接し方（農作業を手伝わせているか、能に関わせているか）
- ・農業への日常的な取り組み方（農業に関する苦労・心配事、こだわり）
- ・黒川能とのかかわり方（何か役をもらっているか、積極的に参加しているか、続けたいか）

5. 黒川能維持モデルの構成

1) 調査対象者の概要

表6は調査対象者29名の基本属性で、男性28名、農家24名、平均年齢62.6歳で、男性、農家、高齢者が多めとなっている。出身は黒川が23名だが、婿養子として黒川外から来た者が5名いるため、黒川出身者に限定されない幅広い意見を得ることが期待できる。表7は営農状況で、専業と兼業がほぼ半々である。平均水田経営耕地面積は3.74haであるが、0.15haから20haまで広がりがある。表8は営農意向のまとめである。「今後の経営方針」は、10名が「現状維持」であるが、「農地の規模拡大」9名で、積極的な営農方針を持つ者も一定数存在する。「経営継続に必要なこと」として、「集落・地域などの協力体制の確立」7名が比較的多い。「その他」が9名と多いが、内訳は、「身内でなくても担い手育成・人材確保を行うこと」「地域の仲間」「息子の意向次第」「息子に嫁が来ること」など、担い手確保が経営継続に必要であると認識されている。担い手不足の問題は、黒川能に関する調査でも同様に聞かれた。表9は調査対象者の黒川能・狂言との関わり方を転居履歴ごとにまとめたものである。29名中23名の対象者が何らかの形で黒川能との関わりを持っている。Iターン者の多くは手伝いなど間接的関わりである。また、舞方・謡方、囃子方、後進指導をする者の多くは子供時代に役を与えられていた者である。

表6 調査対象者の基本属性

性別	職業	年齢（才）	出身
男：28	農家：24	平均：62.6	黒川：23
女：1	非農家：5	最高齢：81	黒川外：5
		最年少：40	不明：1

表7 営農状況

専業か 兼業か	農業従事 家族数	水田面積 (ha)	畑の状況 (該当人数)
専業：10	0人：5	平均：3.74	柿：17
兼業：13	1人：6	最大：20	大豆：3
被雇用：1	2人：5	最小：0.15	そば：3
	3人以上：8		

表 8 営農意向

今後の経営方針 (該当人数)	経営継続に必要なこと (該当人数)
①農地の規模拡大：9	①コントラクター等による農作業支援：1
②生産コストの低減：10	②農地の集積：5
③経営の複合化：1	③組織経営体での営農：2
④6次産業化・高付加価値化：1	④集落・地域などの協力的体制の確立：7
⑤現状維持：10	⑤農業機械・農業施設の再整備：2
⑥新規就農の促進：2	⑥営農資金の調達：1
⑦その他：2	⑦その他：9

表 9 調査対象者の黒川能・狂言との関わり方

	転居履歴				
	転居 無し	U ター ン	I ター ン	不明	計
舞方・謡方	1 (1)	1 (1)	1 (0)	0 (0)	3 (2)
狂言方	0 (0)	1 (1)	1 (0)	0 (0)	2 (1)
囃子方	5 (3)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	8 (6)
後進指導	2 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2)
間接的関わり	4 (1)	1 (1)	3 (0)	0 (0)	8 (2)
関わり無し	3 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (2)
不明	0 (0)	2 (0)	0 (0)	1 (0)	3 (0)
計	15 (8)	8 (6)	5 (0)	1 (0)	29 (14)

注 1：括弧内は、子供時代（小学生以前）から黒川能に深く関わっている人（子供時代に役を与えられていた人）の数。ただし、子供時代と現在とで黒川能との関わり方が一致しているとは限らない。

注 2：「間接的関わり」は、手伝いや鑑賞のみでの関わり。

注 3：能楽の用語では、「舞方・謡方」は能の役者を、「狂言方」は狂言の役者を、「囃子方」は笛や鼓の担当を示す。

2) 黒川能維持モデルの構成

GTA により作成したモデルが図 1 である。以下では、いくつかの概念を軸としてこのモデルを説明する。具体的な発言を適宜引用し、引用文は《 》で括る。なお、各概念の分析ワークシートは紙幅の都合から省略する。モデルは外側の円と内側の 2 つで構成されている。外側の円には社会のあり方に関する概念を集めている。内側の円には、人

びとの意識や試みに関する概念を集めている。

【社会のあり方（外円）】

「農作業の近代化」による「地域社会の弱体化」

外円の左側にある「労働の近代化」とは、基盤整備や機械化による農業労働の変化のことである。《基盤整備後、機械が入ると、村人同士が共同で農作業するという事はなくなった》という発言を踏まえると、基盤整備、機械化により人々の共同作業の機会が無くなる等の側面があったといえる。そこで、「労働の近代化」から「地域社会の弱体化」に矢印を引いた。「地域社会の弱体化」とは、地域社会における人のつながりが希薄になっていること、地域社会の機能が低下していること等を意味する。地域から人（特に子ども）がいなくなったことが、女子の能への参加容認などに結びついたとの発言があった。また、大人は仕事が忙しく、子どももスポーツ少年団の活動などで時間がとれず、能の練習に時間を割けなくなってきているという。これらから、「地域社会の弱体化」は「黒川能をめぐる状況の変化」につながるといえる。これに対し、《祭り（王祇祭）がないと集落のつながりがなくなる》という発言は、逆に「黒川能をめぐる状況の変化」が「地域社会の弱体化」を招くと指摘していると解釈できる。そこで、「地域社会の弱体化」と「黒川能をめぐる状況の変化」を結ぶ矢印は両矢印とした。

担いきれない黒川能の負担

外円上にある「黒川能をめぐる状況の変化」の中での「担いきれない黒川能の負担」は、「地域社会の弱体化」と「黒川能の負担」の両方で引き起こされている。「黒川能の負担」は、「黒川能を担うまでの厳しさ」「黒川能に取り組む負担」「黒川能伝承の媒体」の 3 つの概念で構成されている。「黒川能を担うまでの厳しさ」とは、伝統の担い手になるためのプロセスの厳しさのことで、4 人の回答者が、幼い頃、厳しく能を仕込まれたことに言及している。「黒川能に取り組む負担」とは、当屋で、自宅で能をやることの負担や、農作業を休まなければならないという負担などである。一方、《100%楽しいとは思わないし、本番は緊張するが、終わったときの達成感はある。この達成感を求めてやっている》という発言もあり、負担

図1 黒川能維持モデル

注：（農）は農業関連，（黒）は黒川能関連，（両）は両方に関する発言から得られた概念であることを示す。

は気の持ちようで軽減されている面もあるようである。この点は、後述する外円の下にある「慣習重視思考」とも関わってくる。「黒川能伝承の媒体」とは、伝統を伝えるための媒体に関する言及である。台本という形では（古語であるため）読むのが難しいし、口頭で伝えるにしても練習時間が揃うとは限らない。こうした「黒川能の負担」は、最近になって生じたものではなく、ずっと昔から黒川能にとってつきものの負担であった。問題は、「地域社会の弱体化」により、そうした負担を担いきれなくなったことである。それが、「担いきれない黒川能の負担」という概念の意味である。

黒川能をめぐる状況の変化

「担いきれない黒川能の負担」を含めて、「黒川能をめぐる状況の変化」というカテゴリー（概念

の集合）を作ることができる。このカテゴリーに含まれる「意識のずれ」は、能をする人としらない人、あるいは、外部から婿として黒川にきた人（よそ者）と以前からの住民との意識のずれ等である。「よそ者視点」は、「よそ者」としての自身の立場を意識した発言である。よそ者だから黒川能に《愛着がない》《楽しみだと思わない。継承しようと思わない》と発言する人もいるが、35歳から狂言をはじめて、そこに奥の深さを感じる人もいる。「黒川能の地位低下」は、黒川能に対する人々の関心のなさを示す。継承していきたくないという人もいるし、当屋をキャンセルしたことのある人もいる。総じて、「黒川能をめぐる状況の変化」は、黒川能をめぐる状況が悪化していることを指している。しかし、その中にある「よそ者視点」は、必ずしも黒川能にとってマイナスでは

ない。今回の調査で、婿としてきた「よそ者」は5人いるが、うち3人は黒川能に強い関心を持っているか、黒川能を無くしてはいけないという意識を持っている。

「慣習重視思考」と「革新的思考」

外円の最下部にある「慣習重視思考」は、自分で意思決定するのではなく、慣習や周りの雰囲気に従って自然と何かに取り組む態度を意味する。これは能に関する発言でも、農業に関する発言でも共通してみられる。実家の農業を継ぐのは「長男だから」であるし、能も「周りの雰囲気」で始めたり、「自然と」関わってきたりしている。これらは、一見、周りに流された責任感の無い態度のようにも思える。しかし、《農業に取り組んでいて苦労だとは思ったことはない。何も頑張っ取り組んでいるわけではない。自然の流れの中、年間の流れの中で取り組んでいる》という発言や、《当屋になって隠居するまでは能をやる事が当たり前だと思っている》という発言を考慮すると、こうした慣習的に物事に取り組む発想だからこそ、農業や能を自然と継続していくのだともいえる。したがって、この「慣習重視思考」は、後で述べる「現役志向」にもつながるし、外円右の「黒川能の負担」を低く見積もることで抑制する働きも持つといえる。

こうした「慣習重視思考」という態度と相反するのが、外円左下の「革新的思考」である。「革新的思考」は「能動的な意思決定」と「経営者の発想」の2つの概念で構成される。「能動的な意思決定」に該当する発言には、「農業をやりたい」という自らの意思で就農したという内容のものがある。「経営者の発想」に該当するのは、「市場」「固定給」「販売」「信頼関係」といった経営上の用語を用いて農業について語る発言である。以上のように、自らの職業を自分の意思で決めたり、農業を経営の言葉で考えたりするようになるのは、「労働の近代化」によってもたらされたと考えられる。

【人びとの試み（内円）】

「黒川能をめぐる状況の変化」に対応した「黒川能維持努力」

内円の中心にある大きな矢印は、「黒川能をめ

ぐる状況の変化」に対応するために、「ボランティア的取り組み」と「黒川能の再解釈」の2つを通して「黒川能維持努力」が行われていることを示している。「黒川能維持努力」は、何らかの形で黒川能を維持しようと努力していることを示す。すでに触れた「現役志向」は、年配でありながら、黒川能に現役で関わっていこうとする態度であり、「黒川能を絶やさない努力」は、後継者探しなどにより黒川能を残すための努力をしていることを示す。

【ボランティア的取り組み】

「ボランティア的取り組み」とは、黒川能を維持しようとする試みが、一種のボランティア活動としての様相を見せていることを示す。「プロ意識バランス」は、《黒川能も、農業も、どちらも半分趣味で、半分義務。能にはプロではなく、セミプロとして取り組んでいる》という発言にあるように、プロとしての意識とアマチュアとしての意識をうまくバランスさせながら黒川能や農業に取り組んでいることを意味する。「仲間作り」は、自ら仲間を作っていこうとする試みである。その典型例が、「従来の稽古は役割（笛、小鼓、大鼓、謡）ごとだったため公演であわず、何とかしなければと思って、役割を越えて横断的に若手が一緒に稽古するために（会を）作った」というものである。プロではないことを意識している点、黒川能を維持するという「志」を軸にして仲間を作っている点は、ボランティア組織のあり方に近い。

【黒川能の再解釈】

「黒川能の再解釈」は、黒川能が持つ意味が多様化していることや、それぞれの黒川能解釈にもとづいて黒川能の今後のあり方を決めていこうとする態度を指す。

「黒川能の意味づけ」は、黒川能に対する意味づけが多様化していることを意味する。黒川能を「伝統」と呼ぶ人もいれば、「半分趣味で半分義務」という人もいる。《自分たちにとっては、黒川能は「伝統芸能」ではなく、「お祭り」だ》と、明確に「伝統」というとらえ方を否定する発言もある。

「黒川能の改革」「黒川能の本質規定」「黒川能に関する内向き志向」は、黒川能の今後のあり

方を決めていこうとする態度である。「黒川能の改革」では、黒川能のあり方を変えるための様々な提言が行われている。婿養子で黒川に來たある回答者は《今のやり方では、黒川能は続いていかないだろう。若い人がいないから、自分も集められるが、「よそ者」であると言われてしまう。第三者の意見も取り入れるようになれば良い。これからの黒川能に必要なのは、経費節減。男がみんな飲むので、女性にすごく負担がかかってしまう。しかし、こういうことが話として出ても、すぐにつぶされてしまう》と、「よそ者」ならではの視点で現在の黒川能の問題点を挙げ、改革の必要性を訴えているが、逆に「よそ者」であるためにそうした意見がなかなか通らないことにも言及している。また、「よそ者」だから黒川能の様々な負担を受け入れることができず、こうした改革案を積極的に出していると考えられる。あるいは、黒川生まれ黒川育ちの人でも、《今後については不安がある。マンネリ化もあり、何かを変えることは大変である。例えば、やれることに幅ができるので(蠟燭能なども)朝早くからやりたい。しかし、それでは観光客は来てくれない》と観光客を意識した新しい試みを提案している。

「黒川能の本質規定」は、黒川能を変えようとしても、どこまで変えてよくて、どこから変えてはいけないかという線引きをする発言である。その中でもっとも線引きの基準を明確にしているのは、次の発言である。「昔の体制を維持する事は無理だと思う。ただ、体制が変わっても能自体は変わらないのではないかな。少なくとも自分の生きているうちは、春日神社、地元の祭り、そして黒川能、これら3つの関係が崩壊しないように歯止めをかける事をこれからの人に意識してもらいたい」。「黒川能に関する内向き志向」は、特定の人たちで黒川能を担い、それ以外の人たちへのアピールは控えようとする態度である。「黒川能はあくまで黒川の祭り」、「黒川能は黒川で見てほしい」といった発言がこれに該当する。「黒川能の改革」「黒川能の本質規定」「黒川能に関する内向き志向」の順に、黒川能の変化に対して保守的であるといえる。

6. 考察

まず、モデルの妥当性について検討する。今回作成した黒川能維持モデルは、農作業の近代化や、それに伴う地域社会の弱体化が引き金となって、黒川における人びとの考えが互いに異なってきたこと、そして黒川能をめぐる状況も変化してきていることを示すとともに、こうした社会の変化の下で、黒川能を維持するために人びとが様々な方向性で取り組んでいることを示すものとして構成されている。社会的状況の変化と、人びとの考え方や試みとが互いに影響を与え合って、現在の黒川能をめぐる状況が成り立っていることが表現されており、GTAの特色の一つである人びとの相互作用による「動き」や「流れ」のモデル化が達成されているといえる。ただし、内円・左の「ボランティア的取り組み」はやや概念が少ないように思える。若手や、こうした取り組みをしている組織の構成員に追加調査を行うことで、このカテゴリーをさらに発展させうる。また、今回は住民を対象としたが、行政や、外部向けの公演に訪れる観客も調査対象に加えることで、黒川能をめぐる人びとのより複雑な相互作用をモデル化することができると考えられる。

次に、このモデルの含意について考察する。まず、外円・左下にある「革新的思考」は、今後、農業に対する国の補助が弱まり、個々の経営体の経営努力がますます求められるようになる中で、より一般にみられるようになり、逆に「慣習重視思考」が住民間で共有されなくなることが考えられる。その場合、「黒川能維持努力」が弱まるとともに、「黒川能の負担」は抑制しきれなくなり、「担いきれない黒川能の負担」はますます膨れ上がるだろう。こうした負担を抑えるためには省力化が必要である。また、「黒川能維持努力」を保つために、黒川能の観光化や経済的評価を推進することで、黒川能を金銭的に見返りのあるものにすることも必要だろう。しかし、そのためには、「黒川能の再解釈」により、黒川能の意味づけを変えていくことが必要となる。ところが、黒川能に対する考え方は、地元出身者とIターン者とは大きく異なる。

こうした中で、多様な住民にとって受け入れ可

能な黒川能の意味づけを行わなければならない。一つ、収束点として予測できるのは、「伝統」という意味づけである。U ターン者の発言で《黒川能という伝統あるものを、自分たちの代で無くしたくない》というものがある一方で、I ターン者にも《養子で来たという経緯があるので、黒川能に愛着があるわけではない。しかし、伝統芸能なので、無くしてはいけないと思う》という発言がある。黒川能を「伝統」とすることで、黒川能を維持しようとする人びとの努力を促進することができるし、「伝統」としておけば、過去の黒川能のあり方と断絶したような改変は避けられるだろう。

しかしその一方で、生まれたときから黒川にいる住民の発言で、《自分たちにとっては、黒川能は伝統芸能ではなく、お祭りだ》とするものもある。これは、「王祇祭」というお祭りの中で行われる黒川能の「神事」としての性格に関する言及であると推測できる。I ターン者にとって、黒川能を「伝統」だとする意味づけは受け入れられても、「神事」だとする意味づけは、信仰心が関わるものであるだけに、容易には受け入れがたいものであると考えられる。さらに、近年の黒川能上演において、行政や女性、外部からの観客の役割が大きくなっているが、彼ら／彼女らが「神事」という意味づけを受け入れられるかは疑問である。

今後はこうした「神事」としての黒川能の性格を受け入れられる主体と、受け入れられない主体とを黒川能を維持するという方向に束ねることが大きな問題となる可能性がある。そこで、両者を束ねていく方策として、黒川能の「神事」の側面と「伝統」の側面のいずれを強調するか、その時々で使い分けることで、「神事」としての黒川能は「神事」という性格を受け入れられる一部の住民が担い、「伝統」としての黒川能は関係者全体で取り組んでいく、というように各主体を方向づけ、両者を共存させることが考えられる。具体的には、たとえば蠟燭能や水焰の能のような対外向けの公演については「伝統」という側面を強調して、内部の全関係者が観客を意識しつつ対等に取り組むことで収益性向上に努めるが、王祇祭に関しては「神事」の側面を強調して、地元出身の住民が中

心的に取り組むのを促すなどである⁴⁾。

7. 結論

本研究では、地域社会における黒川能維持の方向性を示すことのできる「黒川能維持モデル」を、社会学の手法である GTA を用いることで、住民に対するヒアリングデータからボトムアップで構成した。モデルは地域社会の変化と人びとの試みや意識との相互作用を表現したものであり、GTA のモデルとして妥当性のあるものである。ただし、黒川能に関わる若手や、裏方の女性、非農家、黒川能維持のために自主的に立ち上げられた組織に関わる人びと、そして行政職員等にも重点的にヒアリング調査を行うことで、今回のモデルをさらに発展させる余地はまだ残されている。

今回のモデルの含意としては、まず、黒川能の維持に関して機能してきた「慣習重視思考」は、今後衰えていく可能性がある。その場合、黒川能の省力化、収益性向上、経済性評価等が必要になってくる。そのためには、黒川能の再解釈が欠かせない。「伝統」という意味づけは、住民間で広く共有される可能性がある。しかし、「神事」としての意味づけは、とくに I ターン者には共有されない可能性がある。さらに近年の黒川能上演において行政や女性、観客の役割が大きくなっていることも考慮すると、こうした各主体を黒川能維持の方向に向けてどのように束ねていくかが大きな問題となると考えられる。「神事」「伝統」の側面のいずれを強調するか使い分けることで、各主体を方向づけ、両者の共存を図ることが今後必要となってくるだろう。

今回の研究は仮説発見型研究として位置づけられる。したがって、いずれは仮説検証型研究につながる必要がある。とくに、黒川能の意味づけの多様性と、黒川能維持努力の態度との関連性は、質問紙調査等で検証すべきである。また、今回行った、モデルに基づく将来予測に関連した仮想質問を行うことも有用である。

注

- 1) スロスビーは、こうした要素から構成される文化的価値が、個人の支払意思額に基づく経済的価値に還元

できない根拠として、支払意思額を示す個人の知識の不足、選好の形で表現することあるいは貨幣尺度に翻訳することの困難さ、集団の一員であることが個人の支払意思額に影響する可能性を挙げている。

2) 以下、3 節の黒川能の現状に関する記述は、特に明示しない限り、本稿でのヒアリング調査結果と柴田〔11〕を参照したものである。

3) 統計分析を行うわけではないので、無作為抽出は必要ではない。GTA では、モデルを構成していく際に、不足したデータがあれば随時データを追加し、モデルをバージョン・アップする、「理論的サンプリング」という方法が取られる。モデルがこれ以上バージョン・アップできなくなる（「理論的飽和化」という）まで調査と分析を追加することが理想であるが、木下は、理論的飽和化は現実には困難であり、調査と分析の終了は現実的な最適バランスで判断すれば良いとしている。

4) 3 節で触れたように、王祇祭に関しては、参加者に観光イベントでないことが周知されることで、「神事」の側面が強調されている。

引用文献

- [1] グレイザー, B.・ストラウス, A. (後藤隆他訳) 『データ対話型理論の発見』新曜社, 1996.
- [2] グロスマン, E. 「黒川能研究の現状と将来」, 『演劇研究センター紀要』, vol.7, 2006, 91-99.
- [3] 長谷部正「風景の〈物語〉」桑子敏雄・千代章一郎編著『感性のフィールド』東信堂, 2012, 23-40.
- [4] 垣内恵美子・吉田謙太郎「CVM による「文化資本」の便益評価の試み」『文化経済学』, 第3巻2

号(13), 2002, 63-74.

- [5] 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂, 2003.
- [6] 北見真智子「1970 年代以降の山形県楡引町の黒川能における上演形態の変容過程」『表現文化研究』, 1(1), 2001, 13-22.
- [7] 木谷忍・長谷部正・飯塚聖司「持続可能な地域づくりのための伝統文化活動の機能について—社会関係資本の土台としての文化資本の観点から—」『地域学研究』, 41 巻第3号, 2011, 731-744.
- [8] 小沢亙・沼澤篤・長谷部正「山形県鶴岡市黒川地区における営農意向と祭の継承」長谷部正『科学技術研究費補助金基盤研究(B)報告書「物語り」の実証に向けて』, 2013, 95-104.
- [9] 桜井昭男『黒川能と興業』同成社, 2003.
- [10] 西條剛央『ライブ講義・質的研究 (SCQRM ベーシック編)』新曜社, 2007.
- [11] 柴田真希「黒川能の伝承に関する民族誌的研究」『東京藝術大学学位論文』東京藝術大学, 2013.
- [12] スロスビー, D. (中谷武雄他訳) 『文化経済学入門』日本経済新聞社, 2002.
- [13] 塚佳織・山本信次「祭礼行事のソーシャル・キャピタルへの影響—岩手県陸前高田市気仙町けんか七太を事例に—」『農村計画学会誌』, 28, 2010, 231-236.
- [14] 山下晋司編著『観光文化学』新曜社, 2007.

付記：本研究は、科研費基盤（A）『農村再建における役割意識創発の実験的研究—農業経済倫理学と社会脳科学の融合—』（代表：長谷部正，平成 25～27 年度）による成果の一部である。

要旨：山形県黒川で 500 年にわたり受け継がれてきた黒川能は、地域社会の変容の中で少しずつそのあり方を変えてきた。本研究では、文化資本としての黒川能の維持を地域社会の持続可能性に関連づけ、黒川能の維持に対する地域住民らの意識や試みの総体を住民へのヒアリングデータからボトムアップでモデル化することで、現代において地域伝統文化を維持していくための一つの方向性を示すことを目的とする。2014 年 2 月 23～24 日にかけて、黒川住民 29 名に対するヒアリング調査を行った。調査内容は、農業への従事状況と今後の営農意向、そして幼少期から現在に至るまでの農業と黒川能への関わり方である。収集したデータは、グラウンデッド・セオリー・アプローチにより分析し、モデル構成を行った。モデルの含意としては、まず、黒川能の維持に関して機能してきた「慣習重視思考」は、今後衰えていく可能性がある。その場合、黒川能の省力化、収益性向上、経済性評価等が必要になってくる。そのためには、黒川能の再解釈が欠かせない。「伝統」という意味づけは、住民間で広く共有される可能性がある。しかし、神事としての意味づけは、とくに I ターン者には共有されない可能性がある。こうしたことを踏まえ、黒川能維持への取り組みにおいて、「伝統」と「神事」の両側面を時に応じ使い分けることで、各主体が共存していけるような方策が今後必要となってくるだろう。

キーワード：黒川能，文化資本，グラウンデッド・セオリー・アプローチ

〔2015 年 6 月 30 日受理〕